

## 鶴岡市における「ふるさと会」組織の活性化



山形県鶴岡市 白幡 佳純

### 1. はじめに

近年、「関係人口」が注目を浴びているが、「ふるさと会」組織はその先駆けである。「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉と定義されるが、「ふるさと会」は多様に関わる人々の中でも、地域との関わりへの想いや、現状の地域との関わりが強い存在である。

そんな中、「ふるさと会」は全国的にも高齢化が進み、会員の減少と若手（担い手）の確保が課題となっている。「ふるさと会」が結成されはじめた当初とは社会的文脈が変わる中、その需要も変わっていることが予測される。

「ふるさと会」は、戦前及び戦後の高度経済成長期に地方から都市への大量移住が生じた際に、厳しい都会生活を生き抜くために結成された。現在、都市の生活環境が改善される中、同郷者のネットワークに頼るといふ風潮は見受けられなくなっている。

しかし、現在も首都圏で故郷と触れる場や機会は重要であり、県外に出た若者等が首都圏にいながら故郷とつながる結節点として「ふるさと会」は重要である。

本レポートでは、「ふるさと会」を活性化させる施策について、ヒアリング調査を行うことによって現在の若者の「ふるさと会」に向けた需要を明らかにし、①「ふるさと会」会員候補に情報を届ける仕組みづくり、②「ふるさと会」本来の目的である「つながり（出身者同士のつながり・出身地とのつながり）づくり」のための仕組みづくりについて提言を行うものである。

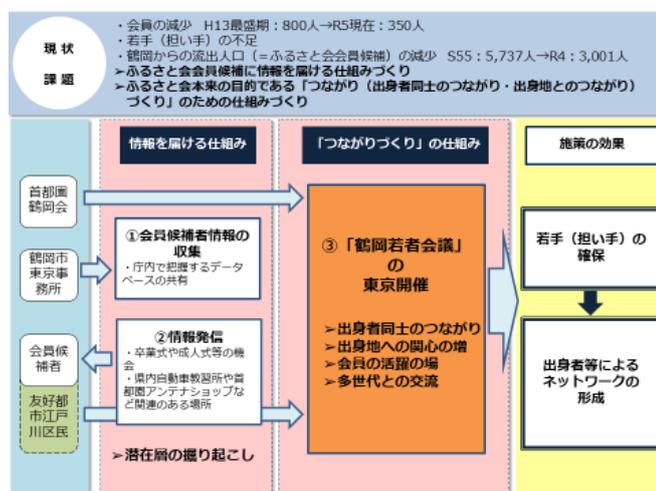


図 1 レポート全体像

### 2. 「ふるさと会」組織の成り立ちと変容

#### (1) 「ふるさと会」組織の成り立ちと変容

「ふるさと会」は、東京圏では既に明治期に設立されており、地方（故郷）と都市（東京）の関係性が時代的に変化してきた現在でも、様々な形態と活動を有しながら存在している。「ふるさと会」は、社会的文脈が変化する中で、どのように求められ、変容していったのだろうか。

「ふるさと会」が組織されるためには、その会員候補となる地方からの流出者が必要となる。そのため、明治後期から昭和 10 年代及び戦後の高度経済成長期に地方から都市へ的大量移住が生じた際に、多くの「ふるさと会」が結成されている。

鯨坂 (2005) は、地方出身者の都市部への移住を、階級・階層的移動との関連において分析し、都市出身者に対して相対的に不利な立場に置かれる彼らが、「近代都市における職場の労働の厳しさと居住・生活条件の劣悪さ」を「国家の社会政策や都市の行政対策、あるいは職場関係や地域関係の形成によって改善されるよりも、家族・親族関係への依存や同郷者間の相互扶助によってなんとか労働・地域生活を維持していた」(鯨坂 2005:1) と推察し、その結果、「同郷的ネットワークやエスニック的關係の維持・生成とそれらを契機としたアソシエーションである『都市同郷団体』の形成がみられた」(鯨坂 2005:1) と結論づけている。「ふるさと会」は、地方出身者が都市の「下層」として組み込まれる中、厳しい都市生活を生き抜くために結成されたものである。

また、中西 (2021) は、同郷者ネットワークが担ってきた職業紹介機能に着目し、戦前の日本では公的な職業紹介制度が未整備であったため、地方出身者は地縁、血縁に基づく「つて」を頼りに都市での住居や職業を確保していったと指摘している。その結果、特定の業種や特定の工場に同郷者が集中する傾向がみられるようになった。

当初は近隣で住み合っていた人々も、ライフ・ステージの段階を経て、その居住地は次第に広がっていく。それゆえ、散らばった会員間のコミュニケーションをとるために、「ふるさと会」の名簿や会報、記念誌が作られるようになった。

さらには、1970 年代以降、「ふるさと会」の会員は次第に広く散在するようになり、他市へ移動する人も多く、またかつてほどの生活苦があるわけではなくなった。そのため、団体の機能としては、春の花見や秋の運動会・演芸会、新年会、総会など親睦が中心のものに変容していった。

## (2) 「ふるさと会」組織の現状と課題

現在の「ふるさと会」の状況についてはどうなっているのだろうか。

最新の調査では、宮嶋・十代田・津々見が平成 12 年 12 月に 23 道県のうち連絡先のわかる 581 会に対してアンケート調査を行い、242 会 (回答率 41.7%) から回答を得ている。この会のうち①「どこに住んでいるか」より「どこの出身か」を基本として組織されている会、②「どこの出身か」より「どこに住んでいるか」を基本として組織されている会の 2 つに分類しているが、本レポートでは「どこの出身か」を基本とする「ふるさと会」について調査を進めるため、前者の 193 会の傾向について分

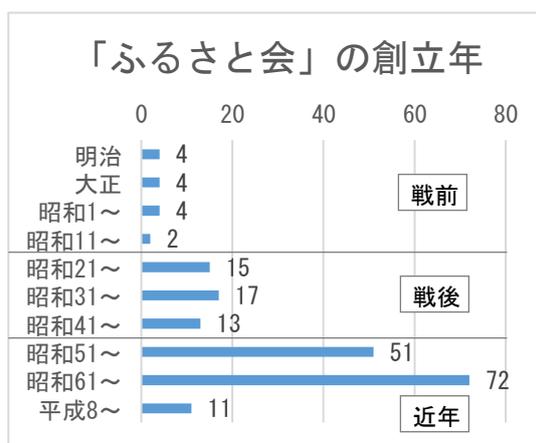


図 2 「ふるさと会」の創立年

出典：宮嶋・十代田・津々見 (2002: 728)  
を筆者一部修正

析する。

以下の現状については、この調査結果に依拠するものである。

まず、「ふるさと会」の創立年について、図 2 のとおり、昭和 20 年代と 50 年代に大きな増加期がある。この増加期については、20 年代からの戦後復興と高度成長期における東京圏への人口流入、50 年代初頭からの「地方の時代」にふるさと意識が高揚したことが契機と推察されている。また、創立年代は「近年」が一番多く、創立時の交流について「出身地の自治体と交流」していた傾向が強いことから、「近年」の「ふるさと会」創立の増加は、出身地の自治体の働きかけによるものと分析されている。

また、「ふるさと会」の規模と構成について、表 1 のとおり、会員数は全体の約 7 割は 100 人以上 500 人未満である。会員の最多年代は 50～60 歳代で、9 割に達している。男女比は男性の方が多い会が過半数となっている。また、最近の会員数変化は「減少傾向」が 45.1%となっており、20 代～50 代といった若い世代の入会が少ないことに悩んでいる会も多い結果となっている。

ただし、調査は平成 12 年のものであるため、全体的な傾向については把握できるが、それから 20 年以上が経過した今、「ふるさと会」の現状は大きく変わっていることが予測される。

会員の最多年代については、平成 12 年時点において 50～60 歳代となっているが、新規の入会が見込めず、当時の会員がそのまま現在の会員となっていることも考えられる。その場合は、現在の最多年代が 70～80 歳代になり、若い世代の入会が少ないという課題はより深刻なものになっているであろう。

### 3. 鶴岡市における「ふるさと会」組織の現状と課題

#### (1) 鶴岡市における「ふるさと会」組織の成り立ちと変容

「ふるさと会」の活性化に向けた新たな施策を考案するにあたり、まずは現状について再考する。

鶴岡市は、山形県で日本海に面する庄内地方の南部に位置し、江戸時代には、徳川四天王筆頭酒井家が治めた庄内藩の城下町として、明治維新以降は、庄内地域の中心的な都市のひとつとして、文化、産業など様々な面で地域をけん引してきた。平成 17 年 10 月には旧鶴岡市、藤島町、羽黒町、櫛引町、温海町、朝日村の 1 市 4 町 1 村が合併して現在の「鶴岡市」となり、人口は山形県内で第 2 位、面積は東北で第 1 位の都市となっている。

当市の「ふるさと会」は、平成 17 年合併以前の旧町村ごとにも存在し、東京圏では「首

質問項目		小項目	
創立年		戦前	7.3%
		戦後	23.3%
		近年	69.4%
創立時の交流		出身地の自治体	70.5%
		居住地の自治体	4.7%
		なし	26.9%
会員構成	会員数	100人未満	4.1%
		500人未満	69.9%
		1,000人未満	17.1%
		1,000人以上	8.3%
	男女比	男>女	60.6%
		男<女	4.1%
		男=女	4.1%
	最多年代	30～40歳代	3.1%
		50～60歳代	91.2%
		70歳代以上	3.1%
会員数変化		増加傾向にある	18.1%
		減少傾向にある	45.1%
		変わらない	36.3%

表 1 「ふるさと会」の形態データ

出典：宮嶋・十代田・津々見（2002：728）を筆者一部修正

都圏鶴岡会」「東京藤島会」「東京羽黒会」「首都圏櫛引会」「首都圏庄内あさひ会」「ふるさと温海会」の 6 会が存在している。それぞれの会の設立年及び会員数は表 2 のとおりである。

	首都圏鶴岡会	東京藤島会	東京羽黒会	首都圏櫛引会	首都圏庄内あさひ会	ふるさと温海会
設立	平成 9 年	平成元年	昭和 46 年	昭和 60 年	昭和 62 年	昭和 60 年
会員数	344 人	192 人	562 人	146 人	467 人	180 人

表 2 鶴岡市の「ふるさと会」の設立年と会員数 (R4)

その中でも、「首都圏鶴岡会」が一番後発の組織となっている。設立の経緯としては、鶴岡への学童疎開を縁に友好都市となった江戸川区に設立された「鶴岡市東京事務所」の存在が契機となっている。鶴岡市東京事務所は、国のふるさと創生事業を活用して平成 2 年に開設された。この東京事務所が拠点となり、先んじて設立されていた市内の各高校の首都圏同窓会等に呼び掛けを行い、平成 9 年に設立されたのが「首都圏鶴岡会」となっている。

目的は、設立時の会則に「会員相互の親睦融和を図るとともに鶴岡市との情報交換を密にし、その発展に寄与する」と記載されている。また、会員の構成は「首都圏に在住する鶴岡市出身者及び鶴岡市に親しみ好意を寄せてくださる方々をもって組織する」としている。出身者だけではなく、鶴岡市に愛着を持つ人々も入会できるものとし、当時の会員数は約 450 名、内訳として、鶴岡出身者のほか、庄内地方全域、東北各県、東京都をはじめ関東全域、九州出身の鶴岡ファンの方々が含まれていた（「首都圏つるおか会」会報第 1 号, 1998. 2）。

また、当時の地元紙には、設立について下記のとおり紹介されている。

首都圏鶴岡会の発足は、同市（鶴岡市）東京事務所が呼び掛ける形で動き出した。昨年 3 月に、同市大山地区の出身者で組織する東京尾浦会、市内の各高校の首都圏同窓会や本社を置く企業などに所属する有志が集まり、設立準備会を旗揚げ。準備会では発起人の選出、会の構成、会則などについて協議を重ね、それぞれの団体内や個人的なつながりを頼りに参加を呼び掛けたほか、鶴岡に好意を寄せる「鶴岡ファン」にも呼び掛け、この日の設立総会を迎えた。（庄内日報 1997-09-30）

「首都圏鶴岡会」は首都圏に集まった鶴岡市出身者によって自然発生的に設立されたものではなく、首都圏における関係人口の創出を目的に、行政が中心となり設立されたものとなっている。

## （2）「首都圏鶴岡会」の現状と課題

本レポートでは、「首都圏鶴岡会」を調査対象として分析を行う。現状、合併前の旧町村を含めた市全域を対象とした「ふるさと会」は「首都圏鶴岡会」のみのためである。

会では、毎年総会をはじめ、鶴岡を訪問する「ふるさと訪問ツアー」、年 1 回、会の活動を会員や江戸川区の関係機関等に周知する会報の発行（1,000 部）、希望者には毎月市の広報の送付を行っている。

ほかにも、友好都市江戸川区で開催されるイベント「江戸川区民まつり」、「鶴岡寒鱈まつり」といった江戸川区や鶴岡市主催のイベントに積極的に参加・協力し、鶴岡 PR を行っている。写真 1 では、「江戸川区民まつり」で故郷のお祭り「天神祭り」を再現し、「化け物」にふんしながら道行く人たちに無言で酒を振る舞い、会場内を盛り上げている。



写真 1 「江戸川区民まつり」での「ミニ天神祭り」

さらに、地元の要望活動にも協力しており、首都圏で開催される「日本海沿岸東北自動車道沿線市町村建設促進大会」や「羽越本線高速化促進大会」に参加し、地元の熱意を首都圏に届ける重要な役割を担っている。

発足の経緯からもわかるとおり、行政との関わりが強く、行政を通じた故郷への貢献活動が多い組織となっている。

会の一大イベントは、総会の開催であり、総会と同時に、鶴岡市で活躍する講師による講演会、交流会を開催している。こうした事業を通じ、新規会員の入会など一定の成果を上げているが、会員数は図 3 のとおり、ピーク時の 800 人（平成 13 年）から半数以下となる 350 人（令和 5 年）に減少している。

また、総会出席者数も減少しており、当初は 200 人超の参加者数が維持されていたが、高齢を理由とした欠席などにより、平成 22 年以降は 100 人を割り込み、減少傾向が続いている。

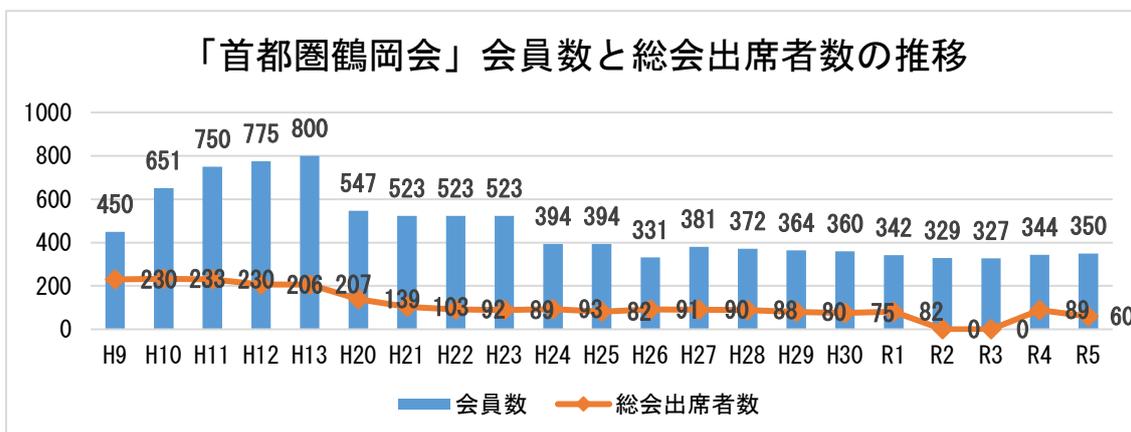


図 3 「首都圏鶴岡会」会員数と総会出席者数の推移

※H14～H19 年はデータ欠損。R2～R3 総会はコロナのため中止。

さらに、新規の入会が少ないため、設立時の会員がそのまま時代とともに年齢を重ね、会員の高齢化と若手（担い手）の確保が課題となっている。年齢については会員登録の際に生年月日や年齢を登録する欄がないため全員を対象にした正確な数値を図ることが困難となっているが、令和 5 年度の総会の際にアンケート調査を行ったところ（回答数 42）、表 3 の

とおり、70代が最多で38%、続いて80代が26%、60代が17%の順になっており、60代以上で8割を占める状況となっている。総会の欠席者には、高齢により参加できない方が多く含まれることから、実際の高齢化はさらに進んでいるものと考えられる。

さらに、「ふるさと会」の会員候補となる鶴岡市からの流出人口も、図4のとおり減少傾向にあり、昭和55年の転出者数は5,737人に対して、令和4年には3,001人に減少しており、今後もさらなる会員数の減少が予測される。

その結果として、会費収入や会員の高齢化に伴い事業の担い手が先細りし、活動の縮小・固定化が懸念される。

	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	計	構成比
男性			4	4	6	8	1	23	55%
女性	1	1	1	3	10	3		19	45%
計	1	1	5	7	16	11	1	42	100%
構成比	2%	2%	12%	17%	38%	26%	2%	100%	

表3 「首都圏鶴岡会」R5 総会時の男女別年齢構成比

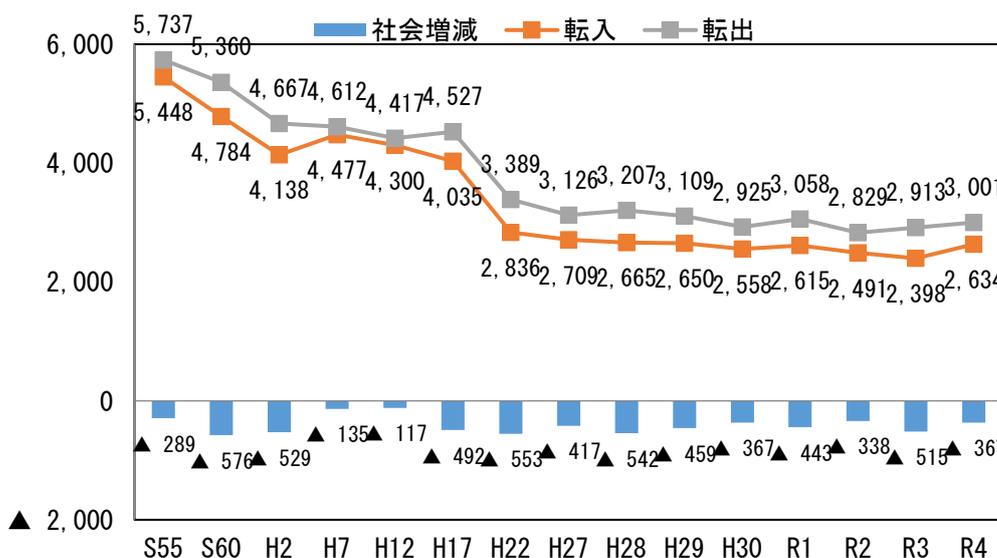


図4 鶴岡市の転入・転出総数の推移

出典：鶴岡市（2020：7）を筆者一部修正

#### 4. 若い世代へのヒアリング調査

社会的文脈が変化する中で、「ふるさと会」に求められる存在意義も変容しているが、現在の「ふるさと会」は若い世代から求められる需要と一致しているだろうか。「ふるさと会」は、古くからある組織であるため、既存の事業を例年通り踏襲する傾向にあることから、新しい時代の需要に対応した施策を行っていないのではないだろうか。

若い世代から求められている「ふるさと会」への需要を明らかにするため、首都圏におい

て鶴岡市に関心を持つと思われる、鶴岡への移住プログラムを経験しながらも、現状は移住には至っていない 8 名に対してヒアリング調査を行った。なお、この 8 名の属性については性別では男性が 5 名、女性が 3 名、年代では 20～30 代が 4 名、40～50 代が 4 名であった。

ヒアリングの項目としては、「鶴岡市の『ふるさと会』を知っているか」「入会している人は何を期待して入会したか」「入会していない人はなぜ入会していないか」「『ふるさと会』の活性化のため、どのような取組があれば良いと思うか」「その他」の 5 項目を提示し、意見があるところについて自由に発言するものとした。

ヒアリング調査において出た意見については、大きく「ふるさと会」を知らない人に対するものと、知っているが入会を希望しない人に対するものについての 2 通りに分けることができることから、表 4 のとおりにまとめた。

圧倒的意見としては、「ふるさと会」の情報が潜在層に届いていないのではないかとというものであった。「ふるさと会」を知っていれば入会している人も多いという意見も聞かれ、首都圏でどのように周知するかについて多くの意見が出された。具体的には、「自分（発言者）は江戸川区で開催された『鶴岡寒鱈まつり』で『首都圏鶴岡会』の人から勧誘を受けて入会したため、何らかの機会に合わせて周知を図ると良いと思う」という意見や、「運転免許証の取得のために県内の自動車教習所に来る人が多いため、自動車教習所に『ふるさと会』の情報を置く」、「アンテナショップなど山形県に関心のある層が来る場所に『ふるさと会』の情報を置く。その際、気軽に参加できるように固いイメージの『ふるさと会』というネーミングは出さない方がいい」等の意見が出された。

また、「首都圏鶴岡会」の情報発信の多くが紙ベースとなっていることについての言及も多く、若い世代が多く使用する SNS を活用した情報発信や、イベントを開催する際は google フォームなどの web で完結できる仕組みを求める声が複数上がった。

一方、「ふるさと会」を知っているが入会を希望しない場合への対応策について、年代が上の人に偏りがあると 20 代から 40 代は参加しづらいという意見が多く出され、年代を区切ったイベントの開催や、対象を狭めたイベントの開催を求める声が上がった。また、物理的距離が離れると情報が届きにくくなるため、鶴岡の近況など情報を得られる機会を求める意見が上がった。

以上のヒアリング調査では、「ふるさと会」を不要とする意見は出ず、同郷であることを共通項としたつながりを求める意見が多く上がった。また、意見を大別すると、①そもそも「ふるさと会」会員候補となる潜在層に対して「ふるさと会」の存在が周知されていないため情報を届ける仕組みづくりが必要である、②「ふるさと会」に若い人々が参加するためには若い世代が多く参加していることが必要であり、年代を区切ってイベントを開催する必要があるに分けることができる。

これらのことを踏まえ、①「ふるさと会」会員候補となる潜在層に対して情報を届ける仕組みづくり、②「ふるさと会」本来の目的である「つながりづくり」ができる仕組みづくりについて考案する。

項目	意見
「ふるさと会」を知らない人に対して	<p><b>①そもそも「ふるさと会」を知らない人が多い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・会を知らない人が多い。高校同窓会に所属しているが、「ふるさと会」と同じ状況で、若い人がいない。</li> </ul> <p><b>②「ふるさと会」の情報に触れる機会が必要</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分は2月に江戸川区で開催される「鶴岡寒鰯まつり」で「首都圏鶴岡会」の方から勧められて入会した。会を知るきっかけが必要。</li> <li>・タッチイベント（「ふるさと会」に触れる機会）がないため存在を知らない。「ふるさと会」に触れる機会をつくるべき。</li> </ul> <p><b>③「ふるさと会」情報に触れる場を多く設定する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運転免許取得のために県内の自動車教習所に来る人が多いため、そこに情報を置く。また、アンテナショップなど山形県に関心のある層が来る場所に情報を置く。その際、気軽に参加できるように固いイメージの「ふるさと会」というネーミングは出さない方がいい。</li> </ul> <p><b>④効果的な情報発信</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちのような関係人口がもっと情報発信していくべき。</li> <li>・インスタなど若い人が使う SNS に合わせた情報発信が必要。</li> </ul>
知っているが入会を希望しない人に対して	<p><b>①年代を区切ってイベントを開催する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふるさと会」は年代が上の方が多く、馴染めるだろうかと不安。若い人が参加すれば自分も参加できる。</li> <li>・年配の方が多いイメージだと、20～40代は足が遠のく。</li> <li>・年代を区切って、新たな会として開催してはどうか。そこに行けば、同年代の鶴岡出身者と会えるような会だと良い。</li> </ul> <p><b>②対象者を狭めてイベントを開催する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「鶴岡出身女子会」「鶴岡出身者のパパママ会」「鶴岡出身者の親の介護がある会」など、対象を狭めると逆に、「あ、自分、対象なんだ」と思ってもらいやすい。</li> </ul> <p><b>③地元の情報が得られるイベントを開催する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふるさと会」主催の飲み会で鶴岡の近況など情報を発信する。鶴岡を離れると情報を得ることが難しくなるため、地元の情報を得られるイベントは有効。大学や就職などで首都圏に出てきて、そのまま首都圏で就職した人は、「鶴岡出身の首都圏在住者がどんな風に暮らしているのか」「Uターンを考えているのか」「そのまま首都圏で暮らそうと考えているのか」など同じ境遇の人の情報を知りたいと思っている。</li> <li>・「ふるさと会」に入ると、こんな良いことがあるよと言うことがアピール出来たら良い。</li> </ul>

表 4 「首都圏鶴岡会」等の「ふるさと会」についての意見

## 5. つながりをつくることのできる「ふるさと会」へ

### (1) 「ふるさと会」会員候補となる潜在層に情報を届ける仕組みづくり

若い世代へのヒアリング調査を踏まえ、現在の需要に対応するための施策として、①「ふるさと会」会員候補となる潜在層に対して情報を届ける仕組みづくり、②「ふるさと会」本来の目的である「つながりづくり」ができる仕組みづくりについて検討する。

まず、①「ふるさと会」会員候補となる潜在層に対して情報を届ける仕組みについて、「ふるさと会」の情報に触れる場や機会を多く設定することが必要である。ヒアリング調査で出た意見として、就学や就職により鶴岡を離れると、意識をしても情報を得ることが難しくなるというものがあ、県外に出てもつながりが途切れないように、高校卒業や成人式といった節目に「ふるさと会」があることを周知する必要がある。

また、鶴岡に関心のある層が「ふるさと会」の情報に触れる場として、県内の自動車教習所や首都圏のアンテナショップなど関連のある施設にパンフレット等を設置する。情報が届く機会を増やすことにより、「ふるさと会」を意識する機会が増えると考ええる。

さらに、鶴岡市では現状、移住や関係人口の創出を目的とした事業を様々な部署で実施しているが、それぞれ個別にデータベースを管理している。そのため、移住担当課などほかの部署で持っているデータベースを共有することにより、効果的な情報発信が可能になると考える。また、このことは、鶴岡の情報を必要としている人々にとっても、様々な部署に個別に情報を求めずに関連する情報を網羅して得られる仕組みとして重要と考える。

## (2) 「ふるさと会」本来の目的である「つながりづくり」ができる仕組みづくり

一方、②「ふるさと会」本来の目的である「つながりづくり」のための仕組みづくりについて、いわき市の「若者会議」である「いわき若者会議」の事例考察から検討する。

「若者会議」とは、若者ならではの視点を市政や地域に活かすとともに、若者と地域のつながりを構築していくためのプロジェクトであり、市町村や都道府県単位で多くの自治体で開催されている。

その中でも、「いわき若者会議」は通常の若者会議とは異なり、「いわきを出た若者、いわきに関心のある若者」を対象に東京で開催し、出身者同士のつながりづくりを図っている。

「いわき若者会議」は、30歳以下の学生・社会人等を対象に、忘年会や新年会の区切りに合わせて定期的で開催されている。ほかにも、新大学生に向けたイベントも開催するなど、潜在層に向けて年代を区切って開催している。

会議の内容としては、主には第1部から第3部まで設定し、第1部から第2部にかけては、故郷の最新情報をゲストから聞くとともに、いわき市の課題をグループで考える機会を設け、最後、第3部では交流会を開催している。

「いわき若者会議」を事例とした理由としては、東京で「若者会議」を開催することによって、市の課題に向き合い、故郷とより深く関わる機会になる点、また「若者」として対象を区切ることによって特定の年代が集まり、つながりをつくりやすい環境となる点、さらには年に1回以上は定期的で開催されることにより、故郷の最新情報に触れる機会となる点が、第4章のヒアリング調査において明らかになった需要を満たすことができると考えるからである。

「首都圏鶴岡会」でも、参加者が故郷と密接に関わりながら、つながりをつくる仕組みとして、「鶴岡若者会議」を東京で開催することを検討する。

対象者については、年代を「いわき若者会議」と同じく30歳以下の学生・社会人等に設定する。

また、会議の内容としては、「いわき若者会議」の場合は、移住を促進するため、いわき市に在住する会社や人々をゲストスピーカーとし、いわき市に移住してからのキャリアを具体的に想起させる仕組みとしているが、「鶴岡若者会議」は同郷者ネットワークの構築を図るため、首都圏に住み活躍する会員をゲストスピーカーに迎え、自分の経験を話す機会を設けたい。会員の中には、専門職（教員・士業など）や大手メーカーを長年勤めあげた方、

都会に出て自分の事業を起こした方、さらには芸能の方面では歌舞伎界で活躍している方など各界に多様なキャリアを持つ方々があり、彼らの持つ経験や人脈は参加者のキャリア形成に様々な示唆を与えるものとする。

また、交流を促すため、ゲストスピーカーは壇上で講演を行うのではなく、複数のゲストスピーカーが中心となっていくつかの小さな車座をつくり、会話を交えながら話を聞く仕掛けとしたい。参加者の年代は、あくまで 30 歳以下の若者に限定しながらも、ゲストスピーカーに同郷のベテラン会員を迎えることにより、会員の活躍の場になるとともに、若手とベテランがお互いを知り、交流する契機になるのではないかと考える。

さらに、会員候補となる鶴岡市からの流出人口が減少する中、出身者ではない新たな関わりを模索したい。この「鶴岡若者会議」を友好都市江戸川区で開催し、江戸川区の若者に交流を促すことによって「首都圏鶴岡会」に誘い込みたい。

江戸川区と鶴岡市は令和 3 年に友好都市盟約 40 周年を迎えた。鶴岡市東京事務所が江戸川区にあることから、年間 30 回以上のイベントを江戸川区で開催している。中でも、鶴岡の冬の味覚「寒鱈汁」を味わうイベント「鶴岡寒鱈まつり」は平成 4 年以降毎年江戸川区で開催しており、江戸川区民に広く「友好都市鶴岡」が浸透する契機となっている。こういったつながりにより、既に「首都圏鶴岡会」に 26 人の江戸川区在住者が会員となっている。「鶴岡若者会議」も、こうした長年の友好関係を生かし、江戸川区の若者に周知を行うことにより、新たな会員候補となる潜在層の拡大を図っていきたい。

以上の施策を行うことにより、現在の若い世代から求められている「ふるさと会」への需要を満たし、若手の確保を図ることにより、首都圏における新たな関わりのネットワークをつくり、「ふるさと会」の活性化につなげるものである。

(参考文献)

- ・ 鯉坂学 (2005) 『都市同郷団体の研究』 法律文化社
- ・ 鯉坂学 (2009) 『都市移住者の社会学的研究』 法律文化社
- ・ 大谷博 (2015) 「若者の政策づくりへの参画—若者会議の現状と課題—」 『徳島経済』 95, 47-58.
- ・ 中西雄二 (2021) 「同郷者ネットワークと職業紹介機能—同郷者集団研究の知見をもとに」 『日本労働研究雑誌』 732, 18-30.
- ・ 宮嶋慶一、十代田朗、津々見崇 (2002) 「東京圏における同郷会の活動特性とその役割に関する基礎的研究」 『都市計画論文集』 37, 727-732.
- ・ 岡橋秀典 (1990) 「広島県における農村からの人口流出と都市の同郷団体—都市・農村関係の社会地理学的研究として」 『内海文化研究紀要』 18・19, 127-159.
- ・ 鶴岡市 (2020) 「第 2 期鶴岡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」
- ・ TATAKIAGE Japan (2023) . 「いわき若者会議」 . TATAKIAGE Japan. <https://tatakiage.jp/service/wakamono/>, (参照 2023-11-28) .
- ・ “古里” を積極支援「首都圏鶴岡会」スタート. 荘内日報. 1997-09-30
- ・ 首都圏鶴岡会 (1998) 「首都圏つるおか会会報第 1 号」